

# 横笛に魅せられて

外立総合法律事務所

所長・弁護士

外立

憲治



1971年早稲田大学政治経済学部卒業。73年弁護士登録。同年米国ワシントン州立大学ロースクールに留学、国際商事取引関連法専攻(LL.M.取得)。75年～76年米国コロンビア大学ロースクールに留学。76～78年米国及び英国法律事務所勤務し実務に従事。帰国後80年外立法律事務所を創立。06年日本弁護士連合会 常務理事就任。06年より文部科学省大学設置・学校法人審議会専門委員も努める。

あるときは時空を穿つように鋭い叫びをも感じさせ、またあるときは目もくらむような多彩な音色で天空は潤い、雅、且つ底無しの幽玄までを表現する能の笛

―能管。幼い頃聞いた抒情歌の繊細さ、哀愁や優しさや、美しく柔らかな、心に染み入るような人間の自然の感情を自ずと表現できる女竹に穴を七つあけただけの笛―篠笛。この二種類の横笛の魅力の虜になって早二〇年以上が過ぎた。

何故笛なんかやる気になったのか、といった質問をよく受ける。私が涉外弁護士と言われる分野の業務をしている故か、イメージが古い伝統芸能の分野とは結びつかないのかもしれない。

平成三年ロンドン出張時に弁護士の自宅に招かれ、夕食を御馳走になった。食後、奥さんがヴァイオリンを弾き、旦那がピアノを弾いた。それがサーの称号を持つ、彼の家のもてなしのかたちだったのだろう。

嫌な予感があったのは、一緒に招かれたモナコから来た金髪でハンサムな若手の弁護士が、求めに応じて躊躇もせずピアノ

ノを伴奏にオペラ、アリアの一節を大声で歌ったときからだった。

彼が歌った後、やはり恐れていたように皆が「ケンジ、お前は何かできるか」ということになった。失礼な、日本男児、俺だって歌ぐらい歌える。「日本の歌でいか」「勿論!」「伴奏なしでネ」、人前で歌える歌なんて、実は学生時代から年季の入った、人生劇場、だけだ。それを歌い終わったとき、数人の聴衆の反応は複雑というか言い表し難い表情であった。どう反応してよいかわからなかったのだろう。

ロンドンから帰国し半年も経たないうちに、今度は当時の駐日アメリカ大使から大使公邸に夫婦で夕食に招かれた。食後また同じようなことが起きた。大使夫人はニューヨークの著名なジュリアード音楽学院を出たプロと言えるほどのピアニストであり、そのときの同伴客は日本商社の役員夫妻。彼は小さい頃からヴァイオリンをやっていたとのことで、ベートーベンの曲を大使夫人と一緒に演奏。さすがの私もそのとき、人生劇場、では

グローバリゼーションにマッチングしないことが分かった。そして何か楽器をやらなくては、やりたいと心から思った。

そんな年の師走、顧問先の会長で、赤坂での伝統芸能を絶やしてはいけないとばかり、よく芸者さんを自分の宴席に呼んでいた方から、或る案件の成功の慰労で接待を受けた。そのときの芸者さんが奏でた凜と響きわたる笛の音に、これこそ捜し求めていた楽器だとすぐさまその席で頼み込んで仲人となってもらい、その芸者さんに連れられて、平成六年一月、プロの福原徹師に弟子入りしたわけである。

当初の一年は音も鳴らず過ぎ、難しい横笛を選択したことに後悔したが、いつかは鳴るだろうと信じ、とにかく毎週末は必ず笛に息を吹き込む作業を続けてきた。

そして十年が過ぎた頃、宗家より「福原桜夜」と名乗ることを許され、名取の末席に加えられた。それからまた十年が過ぎたが満足のいく笛の音は今も出ない。未熟な笛だが、今後も精進を続けねばと決意を新たにしているところである。



次号は、英国特命全権大使のティモシー・マーク・ヒッチンズ氏にお願いいたします。

※本コーナーは、弊会ホームページでもご覧いただけます。